

一昨日から昨日にかけて、永年の念願でもあった家内共々の富士登山を決行した。天候の状況を見て登山日を決定するという所謂状況戦術であったが、5合目以下は雲の中であったが、概ね天候に恵まれての登山であった。

登山日数日前からリュックに携行品を入れたり、必要なものがあるかどうかのチェックをしたりと、さも遠足に出掛ける前の子供と同じであった。それでも、富士学校和楽館通いで体力錬成もしており、準備万端整った。問題は、高山病対策のみであった。

#### ① 登頂7時間半

午後から休暇を貰って、午後3時須走口新5合目の東富士山荘に出発。ご主人の米山氏に登山の注意や登山に纏わる色々な話を聞きながら、家内の高地順応をじっくりと待つ。金剛杖と酸素ボンベも購入、1640見送られて登山開始。天候は曇りなれど頂上付近は問題ない模様。

本5合、6合と順調に登る。遠く、大月市や富士吉田市方向、時折稲妻が発生。夕闇にくっきりと光る幻想的な光に感嘆しつつ登山続行。「雷様を下に見て」の歌詞を思い出しつつ。雷雲が近づいて来るようならば、近くの山小屋に避難せねば成らないがと思いつつ。幸いに停止したままであった。7合目近く、パラパラと小雨、雨具をつけるほどではないが、濡れて体力低下を招いても元も子もないと雨具着装。直に脱いだけれども。マメな者が最終的には強い。

家内も汗で濡れた下着を取り替える。暗くなり、前後に登山客がいない時は 便利だ。本7合目付近からは、山梨県側の富士吉田や山中湖村、御殿場や須走の灯が点滅して、それを堪能しつつ調子よく続行。少年工科学校3年生の登山が中止になった旨を山小屋で聞いた。

面白いことに下の山小屋のポカリスエットの値段よりも安かったから、解らないものだ、物価は高度に比例しないのか。山に値段はあってなきが如し、値段は適当なものならん。

8合目、2135 山小屋は既に閉まっている。富士吉田口からも勿論須走口からも登山者はない。須走方向は雲に覆われているが、山梨側の夜景は最高、あれが何で向こうが何だと言いながらの登頂であった。ゆっくりとした登山と新5合目での休憩が功を奏したのか元々体力もあったからなのか危惧していた高山病もその心配すら全くなく極めて順調。途中、中年男性4人組を追い越した。

8合5勺：2233、9合目：2330。この分では頂上に早く着きすぎると思いつつも行けば何となるのではなかろうかと思いつつ登山続行。見上げる天空には、星が瞬いている。遠く雷鳴と稲妻を眺め、夜景を堪能しつつ。ヘッドランプの光が覚束なくなり、遂には消えてしまった。電池は真っ新であったはずなのに、摩珂不思議。道は岩場、然も急峻、家内のランプ頼りに唯ひたすら頂上を目指す。

平成13年7月18日0010、久須志神社前に立つ、登頂成功。満天（に近い）の星が祝福してくれた。しかし、風は強く寒い。寒さを除ける場所とてなく二人して体を寄せ合ったり、金剛杖を振り回したり。他に登山者なし。程なくして、富士吉田口より登頂したという外人大学生、所要時間4時間30分で、スポーツ万能でロッククライミングもやっていると。また、暫くすると彼の連れ2人。そして、庶務幹部が邪魔しに登ってきたから驚き、早坂君も高山病に悩まされながらも登ってきた。心配してくれて

有り難いけれども、「2人の恋路を邪魔する積もりか!」と言わずものがなのことを言  
ってしまって申し訳なし。

7時間半というのは女性としては早いのだろう。山小屋で大休憩をすることなく、登  
ったのだから大したものだと家内を褒めてやりたい。0300前後に登頂出来ればとの  
見積もりが狂ってしまって、頂上で3時間余り寒い思いをすることになってしまったが、  
小生の家内の体力見積もり誤りだ。

## ② お鉢巡り

0230頃、東京屋頂上店の店主早野氏が起きてこられたので、庶務幹部が調整、  
早めに店に入れて貰った。何と暖かいことか、そしてサービスして貰った「饅頭とコ  
ーヒー」の旨かったこと。忘れられない。感謝。東天雲海上の、上弦の若い三日月と  
明けの明星ともう一つの一等星が形為す天空の三角形が美しかった。御来光待ちの登  
山者も逐次に加え、山頂が賑わいを見せ始め、頂上東京屋も大入り満員だ。

0350頃から東の空が白み始め、撮影の場所取りが始まる。0437御来光。雲  
海から旭光が顔を出す。と、見る間に一面に紅い光が満ちる。早野氏にお鉢巡り後に  
聞いたところでは、まずまず良いほうの御来光ではないかとのことであった。地平線  
からの御来光はシーズンに数えるほど、然も8月末の秋口の方が多いとのことだ。反  
時計回りにお鉢巡り、日本最高峰の地に立つ。明るく陽気な大学生と歓談しつつ、影  
富士を彼等に教えながらの約2時間の 雲上の散策である。家内は、娘や息子、友人・  
知人に郵便局で葉書を投函。勿論、自分宛にも出したことは言うまでもない。富士講  
の方々が、例の装束姿で登ってこられたが、彼等の信心の深さに頭が下がる。矢張り、  
富士は神の山だ。



## ③ 登頂よりも苦痛の下山

0630、早野氏に別れを告げ、揚々と下山開始。5合目以下は雲の中であり、下  
界を見ることは叶わなかったが、次第に陽差しも強くなり、汗ばんでくる。快調に下  
山していると思いきや、家内の足取りが可笑しい。どうやら、膝が笑い始めたようだ。  
次第に歩みが遅くなる、各山小屋が終始見えていて、近づいている気がしないから、  
きつきも倍増する。7合目砂走りに入ってから、特に膝に力が入らないとかで、両  
手に金剛杖、私に脇を支えられつつの（家内のリュックを背負い、家内を介助する私  
は、白馬に跨った王子か騎士だった? いやに老けた王子と笑うなかれ）、一步一步の  
ノロノロ下山だ。

砂走りと言え、31年前BOCの学生の時走り降りた時のイメージに比べれば岩が多くなって怖い。一寸残念だ。砂払い5合目山小屋「よしのや」さんが見えてからは益々酷い状態で、小生がオンブしようとしたが、小生も疲れており無理だった。

照井庶務幹部が脱兎の如く駆け下りて、駐車場までの輸送を依頼、快く受けて頂き、大助かりだった。到着0930約3時間の下山であった。聞けば、日に一名ぐらいは家内と同じような人が助けを求めて来るという。家内のある知人は登山よりも時間をかけて下山したという。そこから駐車場までは約2km、あと数時間は要したのではなかろうか。家内の頑張りを褒めてやりたい。

無理に休暇を取って割り込み参加した庶務幹部と早坂君、3つの山小屋の人々の御好意に助けられての記念すべき登山であった。感謝。